

Card Magic Magazine



No. 6

October 7, 2012 by Hideo Kato

Thirty Card Mystries

= 第 5 回 =

16. シングルカードリバーズ

= The Single Card Reverse =

* 現 象 *

借りたデッキをシャフルしながら、カードの向きがそろっているのを見せます。表向きに両手の間に広げて、客に1枚のカードを抜かせます。デッキを表向きのまま中央からカットして持ち上げ、下半分のいちばん上のカードをよくみせてから、そのの上選ばれたカードを返させます。

上半分が下半分の上に重ねられて、選ばれたカードは隠れます。デッキをひっくり返して裏向きに広げますが、全部裏向きにそろっています。こんどは表向きに広げますが、こんどは1枚だけ裏向きのカードがあります。それが選ばれたカードです。しかもよく見ると、そのカードは先ほど置いたカードの隣りにあります。

* 方 法 *

デッキを最初にオーバーハンドシャフルするときは、表を右に向けて行い、すべてのカードをシャフルし終わったら、右手の陰でボトムの2枚を右に倒し、左指先の上に落とします。続けて右手の指先でデッキの左サイドを右方に引いて、デッキを表向きに返して、先に落とした2枚のカードの上に重ねます。以上によって、表向きのデッキのいちばん下に、裏向きのカードが2枚ある状態になります。

表向きのデッキを両手の間に広げますが、いちばん下の裏向きのカードをスライドして、広げたカードの下に運びます。客にまん中あたりの1枚を抜かせ、抜かれたところから分けますが、スライドした裏向きのカードが右手のカードのいちばん下になるように分けます。客が抜いたカードを他の客に見せているとき、両腕をわきに下げますが、すぐ上に戻すときに、両方のポケットを密かにひっくり返します。どちらも表向きのカードが上に出ますから、ひっくり返したのは気づかれません。

左手のポケットのフェースカードに注目を集め、そのカードの名前を強調します。そしてそのカードの上に客の選んだカードを表向きにのせさせます。そしてその上に右手のポケットを重ねます。

現在のカードの状況は、中央近くに表向きの2枚があり、いちばん上に表向きの1枚があり、その他はすべて裏向きです。観客はすべて表向きだと思っています。ここで密かに、右手をデッキ

の上にか、いちばん上のカード以外のカードをひっくり返します。

それからデッキを裏向きにして、両手の間にゆっくり広げていきますが、中央近くになったら、10枚ぐらいまとめて送り、表向きのカードが見えないようにします。カードを閉じて表向きにします。

そして表向きに両手の間に広げていきますが、中央近くになったら1枚ずつ送り、裏向きのカードが1枚見えたところでストップして、裏向きのカードの上で分けて、右手のカードを表向きのままそろえてテーブルに置きます。

左手が持っている下半分の前エンドを少し持ち上げて、右手で2枚の裏向きのカードをつかみ、2枚をそろえたまま斜め上方にずらします。半分ぐらいずらしたらストップし、前エンドをつかみ直して、手前に倒して左手のパケットの上に置きますが、そのとき同時にパケットを水平に戻します。そしていま表返したうちの上の1枚だけをプッシュして右手で取り、その下に先ほど強調しておいたカードがあることを示します。

* 訳注 *

これは、“Card Magic Library”第1巻注でエピソードとして収録したのですが、同巻では簡略な説明でしたが、上記は原著からの全文の翻訳です。

原著の説明のままでは、ボトムの2枚を落とすのが困難です。オーバーハンドシャフルするとき、1枚目と2枚目をシングルで取ったあと、3枚目をインジョグしてやれば、シャフル後に右手でしたからデッキをつかむとき、インジョグより下の2枚を左手の指先に残すことができます。

ジョーダン、デッキを反時計方向に返していますが、インジョグより上のカードを右手で上からつかみ、時計方向に返した方が、動作が簡単になりますし、下の2枚がギャンブラーズコップの位置にありますから、まったく露見しなくなります。

いちばん上のカードの下のカードを全部ひっくり返すという、ハーフパスのような技法を行ったあと、デッキを裏返すという部分があります。これは別々の動作として行うより、ハーフパスしたら続けて左手でデッキを手前に返すことによって、まえの動作が目立たなくなります。

17. ハーフパックリバーズ

= Half Pack Reversed =

このトリックはやり方は簡単ですが、前述のトリックに続けて演じると、不思議さをさらに盛り上げることができます。

* 方 法 *

前述のトリックに続けて、デッキをシャフルしてから左手に持ち、右手で上半分をカットして、表向きにテーブルに置きます。そして左手のポケットを裏向きにその上に重ねます。いちばん上の裏向きの1枚を取り、そのカードを表向きにして、デッキの上に魔法をかけます。そしてデッキを広げると、全部表向きになっています。

* 方 法 *

デッキをオーバーハンドシャフルするとき、前述のトリックとは反対の向きに持って行きます。すなわち、表を左に向けてシャフルするのです。シャフル直後に下の3枚を、右手の陰で表向きに左手の指先に落とし、残りのカードを裏向きにしてその上に重ねます。

右手で上半分を持ち上げるとき、左親指を下側のポケットの左から下に入れて、持ち上げかけた右手のポケットの陰で、左手のポケットを素速くひっくり返します。右手のポケットを表向きにテーブルに置きます。右手を左手のポケットの上にかけてながら、いちばん上のカードをボトムにスリップさせて運びます。

左手のポケットはいかにも全体が裏向きのように見えますが、トップの2枚とボトムの1枚が裏向きで、あとのカードは全部表向きです。左手でそのポケットの両側を見せてから、いかにも裏向きの状態で、テーブルの表向きのポケットの上に重ねます。以上の動作は、いかにもデッキを中央で表と表が向き合った状態にしたように見えます。

デッキ全体を取り上げ、トップの1枚を取り、それを表向きにしてデッキに魔法をかけてから、表向きにトップに置きます。

トップの2枚をずらさないように、カードを広げていきます。中央近くになったら、10枚ぐらいためて押し出し、広げるのを続けます。いかにも全部表向きであるかのように見えます。ひっくり返っている2枚のカードを他のカードと同じ向きに直してから、つぎのトリックに進みます。

* 訳 注 *

右手で上半分を持ち上げて、その陰で左手で下半分を返し、続けて右手のポケットを表向きに戻しています。これはのちに現れる'天海リバーズ'の構造に似ています。両方を返したあと、左手のポケットの下に右手のポケットを合わせれば、まさに'天海リバーズ'です。

原著では、"右手のポケットを表向きにテーブルに置き"と書かれていますが、右手を返したあとに、そのまま右手でテーブルに置くことはできません。ですから、天海リバーズのように2つのポケットを返し、そのままゆっくり2つのポケットを重ねるとよいと思います。

18. オールタネイトリバース

= The Alternate Reverse =

* 現象 *

デッキを表向きに左手に持ち、1枚ずつ右手に取っていきますが、1枚目は表向きに取り、2枚目は裏向き、3枚目は表向き、というように、裏表交互に取っていきます。全部のカードをそのように混ぜてから、魔法をかけると、カードは全部同じ向きにそろってしまいます。

* 方法 *

操作をうまく行うには、両手の位置が体に対して望ましい位置関係に保たれることが重要です。1枚目を表向きに右手に取る時は、両手を少し体の左、そしてやや下の方に位置させて取ります。図1。



つぎに両手を少し右上に運びながら、左手を手前に返して、左親指で押し出したカードを裏向きに右手のカードの上に取ります。図2。



右手は指でカードを包み込むように受け取るようにします。そうすれば、受け取ったカードが自然にそろうからです。そして取るときに右親指で勢いよく取ることによって、音をたてるようにやります。続いて両手を左に振って3枚目を表向きに取り、つぎは右に振って裏向きに取り、そのように続け、12枚ぐらい取ったときにストップして、取ったカードを広げて、裏と表が交互に混ざったのを見せます。そして操作を続けます。両手をリズムカルに振り、音をたてるようにやります。

26枚目を取ったら、右人さし指をポケットの下に入れて、両手を左に運びつつ、右手のポケットを左に起こし、図3のように左手のポケットの下に入れ、右手は左手のポケットを丸ごとつかみ、いかにもまえと同じように1枚取る振りをして、全部取ってしまいます。そして右てのポケットを丸ごと左手に置いてきます。ポケットを交換するわけです。



そしてまえと同じ1枚ずつ交互に取る操作を続けます。そうすると、左手のポケットの表向きのカードはそのまま右手に取られ、裏向きのカードをひっくり返されて右手に取られることとなります。結果として、すべてカードが表向きになります。

この操作を行うときのもうひとつのポイントは、右手のポケットがつねに45度ぐらいに傾けて保持するようにすることです。

カードを広げて、全部表向きにそろっていることを見せます。

* 訳 注 *

解説を読んだときは、こんなやり方が通用するのかと思いましたが、かなりやり慣れて鏡に映して見ると、スロップシャフルよりむしろリアルな混ぜ方に見えます。当然ながら、カードの表面が観客になるべく見えにくい角度でやるべきです。

スロップシャフルと同じように、1度に何枚かずつ取った方がよいかも知れません。

今日の発見

= 第5回 =

No.014 イルーシヴピップ

投稿日：2007年10月10日

雑誌”ヒューガードマジックマンスリー”1956年7月号に書かれている、ナート・ライプッチヒの’Illusive Pip’は、ピップの数とインデックスの不調和の問題を解決しています。

不調和とは、たとえばデッキのフェースにダイヤの3があって、ダイヤの2をパームしている右手でそれをなぞって変化させたすると、中央のピップがなくなると同時に、インデックスも2に変わります。ですからそれは、ダイヤの3がダイヤの2に変化するという現象になってしまいます。ライプッチヒはその点のまずさを、ハンドリングでうまく解決しています。

スペードの4をフォースして見ておぼえさせ、トップにコントロールします。相手のカードを見つけると言って、スペードの5を見つけてフェースに置き、「これがあなたのカードでしょう」と言って、スペードの5を見せます。相手は否定します。相手のカードをたずねます。ここまでで、バックにあるスペードの4を右手にスチールしてパームしておきます。

「ではこうしましょう。よく見ていてください」と言って、デッキを表向きにディーリングポジションに持ち、さり気なく左親指の先を左上のインデックスの数の部分に当てておきます。

右手をフェースに当てて、パームしているスペードの4を置き、フェースカードの中央をこする動作を行います。やや左上から右下方向に指先を何回か往復させます。最後は、図1のように右下に動かして、右指先を右インデックスの上で止めます。インデックスの数が見えていないので、ピップが消えたことを印象づけることができます。

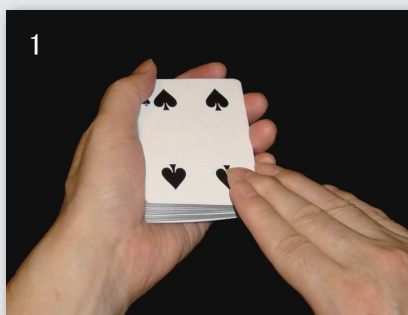


図1で少し間をとったら、左親指と右指先を両インデックスから同時に外します。「ほら、あなたのカードに変わりました」と言います。

投稿日：2007年10月11日

今日見つけたのは、アイデア賞ものです。雑誌”ヒューガードマジックマンスリー”1959年8月号に、ボブ・ネルソンが書いてある’Brainwave Buildup’というトリックです。つぎのような現象です。

ケース入りデッキを取り出してテーブルに置きます。1人の客に52枚のうちの好きなカードを言わせます。デッキを表向きに広げると、1枚だけ裏向きになっているので、それを抜き出して最初の客とは別の客にそのカードの表を見せます。そして予言が書かれている面をその客だけに読ませて、「予言が当たっていますか」と問いかけると、その客は「当たっています」と答えます。そしてカードを表向きにすると、1人目の客の言ったカードなのです。

やり方を知りたい方は、”ヒューガードマジックマンスリー”を読んでください。

補 足

いかがですか、やり方がわかりましたか。原著にはプレゼンテーションが詳しく書かれていませんので、私が考えた運び方を説明します。

インビジブルデッキを使います。「選ばれたカードだけ裏向きになっている」というのを予言として用意します。

紙を取り出し、裏向きにテーブルに置いて、「この紙にはこれから選ばれるカードが予言されています」と言います。

1人目の客に好きなカードを言わせます。ハートの8が選ばれたとします。デッキを取り出して表向きに広げ、客が言ったカードを裏向きに出して、「もしもこれが選ばれたカードだったらすごいですよね。あなただけ見てください」と言って、カードを選んだのとは違う客にそのカードの表を見せます。いったんそのカードを裏向きのままテーブルに置きます。

「しかも予言が当たっていたとしたらもっとすごいですよね」言って、予言の紙を取り上げ、いまカードの表を見せた客に予言の文面を見せ、「ここに書かれている予言は当たっていますか」と問いかけます。客は肯定します。カードを取り上げて表を観客に見せて、「はい、予言通りハートの8です」と言って終わります。

No.016 ハンカチーフを貫通するカード

投稿日：2007年10月11日

雑誌“ヒューガードマジックマンズリー”1960年2月号の中に、私がMr.マリックに見せて、マリック師が改良のアイデアを思いついたトリックとそっくりのトリックを見つけました。あまりにも素晴らしいものなので、ずっとマリック師と私との間の秘密として、いままで発表を控えていたものです。それはジーン・エルモが書いている‘カミングアップ!’であり、ネルソン・ダウンズが“アートオブマジック”(1909年)に書いたトリックのバリエーションです。

エルモのバージョンが公表されていることがわかりましたから、秘密を保つ意味がなくなりました。とは言っても、ここにやり方を書くのはあまりにもすご過ぎるものです。ただし、エルモのやり方がすごいと言っても、実用的にはマリック師のやり方の方が優れています。それについては、マリック師のために秘密にしておきましょう。

カミングアップ！

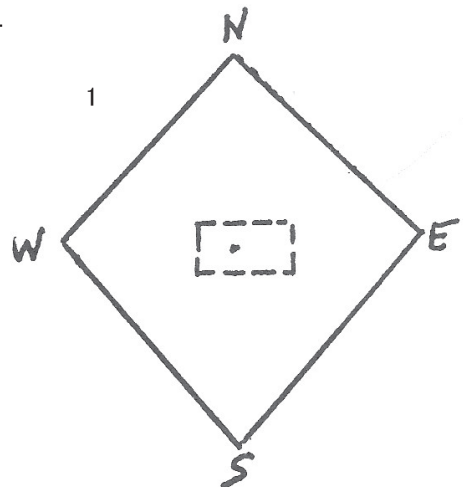
= ジーン・エルモ、雑誌“Hugard Magic Monthly”1960年2月 =

* 準備 *

使うハンカチの中央にマジシャンズワックスの小さな固まりをつけて置きます。

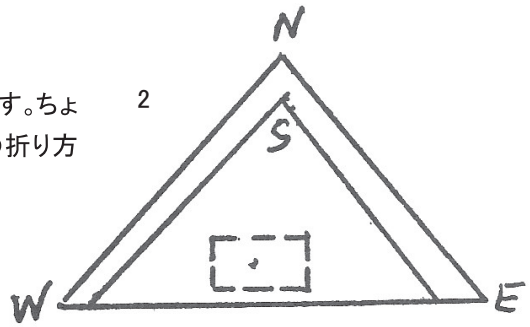
* 方法 *

選ばれたカードをトップにコントロールして、デッキをテーブルに横向きに置きます。

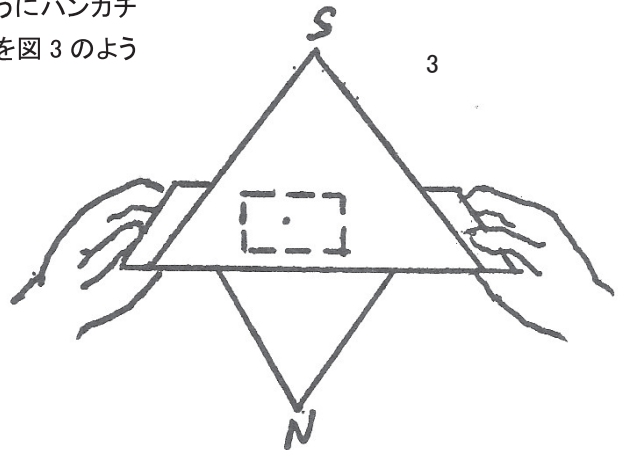


ハンカチをデッキにかけますが、図1のようにかけます。ワックスをトップカードに押しつけて置きます。

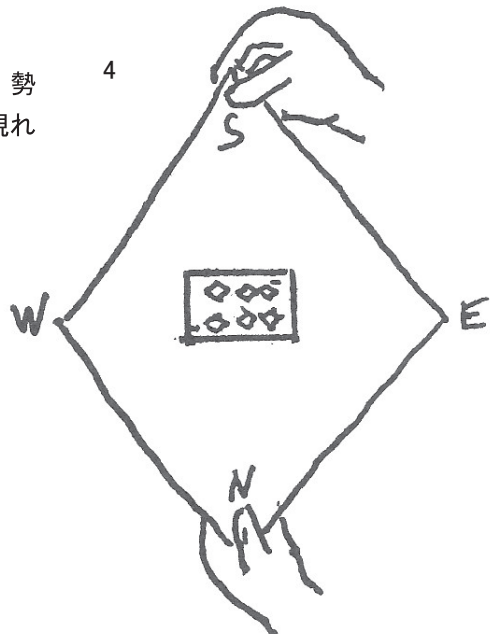
下のコーナーを上へ折って、図2のようにかけます。ちょうど折り目がデッキの手前サイドに沿うぐらいの折り方です。



ハンカチの左右のコーナーを左右の手でつかみ、両手を持ち上げると、くっついたカードがハンカチの手前に出ます。そのカードがデッキにそろそろようにハンカチをデッキの上に置き、そして前のコーナーを図3のように前に出します。



ハンカチの上と下のコーナーを左右の手でつかみ、勢いよく上下に引くと、図4のように相手のカードが現れます。



No.017 フェイダウェイカード

投稿日：2007年10月11日

今日は、私の考案した作品がひとつ減りました。というのは、私の考えたのとそっくり同じトリックが雑誌“ヒューガードマジックマンズリー”1961年1月/2月号に、ジム・ウィルソンによって“The Fade-away Card”として解説されているのを見つけたからです。現象はつぎの通りです。

客が1枚のカードを選んでおぼえ、リボンスプレッドされたデッキのまん中あたりに戻します。デッキをよくシャフルしたあと、マジシャンはデッキをチャーリエカットの位置に持ちます。すると突然、選ばれたカードがデッキのトップに表向きに現れます。

昔、ヒンジカードについて読んだとき、それは縦方向のヒンジカードでした。すなわち、エンドで2枚のカードがセロテープでくっついているものです。私はサイドをくっつけるヒンジカードを考えました。

選ばれたカードをヒンジカードの間にはさみます。ヒンジカードの開く方のサイドを親指側にして、デッキをチャーリエパスの位置に持ちます。

そのあとの選ばれたカードの現し方は、あなたが考えてください。

フェイダウェイカード

= ジェミー・ウィルソン、雑誌“Hugard Magic Monthly”1961年1月 =

ヒンジカードとは、2枚のカードのエンドもしくはサイドがセロテープなどで接続されたものです。以下に説明するマジックでは、サイドがセロテープでヒンジされたものを使います。

準備

1枚のカードを表向きに置き、その隣に裏向きのカードをサイド同士を接触させて並べます。そして接触しているサイドの上にセロテープを貼ります。そして裏向きのカードを表向きのカードの方に折り返します。2枚がぴったり重なるように作ります。このマジックでは、ヒンジカードのうちのバック側のカードの開く側のサイドを、少し上向きにそらし、2枚の間にすき間があくようにしておきます。ヒンジカードをデッキのボトムに置いておきます。

方 法

相手に1枚のカードを抜かせ、おぼえている間にデッキをリボンスプレッドします。ヒンジカードのオープンサイドを左に向けます。

相手のカードを受け取り、スプレッドの適当な位置に入れると見せて、ヒンジカードの中に押し込みます。カードをそろえます。

しっかりそろえても、ヒンジカードにはさまれた相手のカードは、微妙にサイドから突き出ています。カードをよくシャフルします。

ヒンジカードがデッキの中央にくるようにして、オープンサイドを左にしてチャージャーパスの形に持ち、左に突き出ているカードより下のカードを落とします。分かれ目の上のボトムが相手のカードです。そこへ親指を入れて、図1、相手のカードを親指で引き出し、ひっくり返して表向きにトップに落とします。図2。



備 考

原案ではヒンジカードをそらしてすき間をあけると書かれていますが、ボトム側のカードをショートカードにしておくことによって、そこから分けることができます。

カードマジック徹底研究

エイトカードブレンウェーブ Part 5

ヒストリー

今回は、'エイトカードブレンウェーブ'の現象を生み出す根幹である、オルラムサトルティの歴史的話をまとめ、最後にオルラムサトルティを土台として、私が考案した技法と作品を解説いたします。オルラムサトルティの土台となった技法は、フラッシュトレーションカウントです。まずは、その技法が世に登場したときの作品紹介から始めます。

カラーブラインド

= ノーマン・ホートン、雑誌 "Ibidem" No.1 June 1955 年 =

オルラムサトルティの考案者は、エドワード・マルローであり、"Marlo"のスペルを逆にした、"Olrām"というスペルが技法の名称としてつけられました。

この技法の優れたところは、右手と左手で2枚のカードを同時に見せるために、左手の方で起こる矛盾が目立たないということにあります。たいていのカードマジックの技法や現象が生まれるには、土台となったものが存在するものです。この技法も例外ではありません。

それはフラッシュトレーションカウントです。この技法では、ひとつのポケットの面だけを見せてカウントしていくものです。その名称は、1969年にアメリカのアボットマジック社から発売された、ジョン・ハマン考案の'Flushtation'というポケットトリックで、この技法が使われたことに名称に由来します。

ということで、この技法がハマンの考案であるとされてきましたが、その後ダーウィン・オルティスが、同じやり方がもっと以前に存在していたことを発見いたしました。それがここに解説する、ノーマン・ホートンの'カラーブラインド'です。カードマジックの技法や現象、そして作品が生まれ、今日よく知られるに至るまでには、何人かの英知が重なってできるものであるという例として、この作品を明記しておきたいと思いました。

* 方 法 *

赤裏デッキのボトムから2、3、4枚目に青裏のカードをセットしておきます。赤裏デッキを表向きに持ち、フェースから4枚のカードをオーバーラップさせてディールします。残りの赤裏デッキは裏を上にして、わきに置きます。

青裏デッキから1枚のカードを抜き出し、赤裏デッキに近づけて色違いであることを見せます。「この青裏のカードを赤裏のカードに混ぜて、テストを行います」と言い、この青裏のカードをテーブルに置いた4枚の中央に入れます。他の青裏デッキは使いません。

5枚を取り上げて、つぎのようなフラッシュレーションカウントの変形を行います。5枚を表向きにビドルポジションに持ち、右手を返してボトムカードの青の裏面を見せます。右手を戻して、フェースカードを左手で引いて取ります。

右手を返して青裏を見せ、右手を戻してフェースから左手のカードの上に取りますが、そのとき左手の1枚を右手のポケットの下にスチールします。

右手を返して3枚目の裏を見せます。こんどは赤裏です。右手を戻して3枚目を左手で取るとき、スチールした赤裏のカードを左手のカードの方に戻します。

右手には2枚のカードが残っています。フラッシュレーションカウントの続きで、2枚の青裏として左手のカードの上に取ります。以上で青、青、赤、青、青と裏面を見せました。

「じつはこれは色盲のテストなのです。1枚だけ色違いだったのは青でしたか。赤でしたか」とたずねます。もういちど、まえと同じカウントのやり方をすると、赤、赤、青、赤、赤と裏面を見せることができます。最後のカードは上ではなく、下に入れます。そして、青が色違いだと告げます。

「私の言っていることを疑う人がいますが、本当に色違いは青なんですよ」と言って、5枚のカードを広げてひっくり返します。赤裏の中央に1枚の青裏があります。

* 備 考 *

このようにハマンの技法だと思われていたものが、少なくともホートンによって先に記述されていて、そのホートンさえ上記作品の備考において、つぎのように書いています。

このトリックは、古くからある同じカードの面を何回も見せて、何枚も同じ面があると見せる古くからある原理を、ビドルカウントの形で行うようにしたものです。

そして1998年に、ホートンの作品集“Wit & Wizardly”が発行されたとき、同書の編集者のアリエル・フライリッヒは、ホートンが指摘していた作品は、雑誌“ジックスNo.44”(1938年)に解説されている、ハリス・ソロモンによる“Nomolos”という作品で使われている、ヒンズーシャフルしながら右手を返して、ボトムカードを何回か見せる技法のことだと指摘しました。(‘ノモロス’は、“Card Magic Library”第8巻に解説されています)。

その作品の考案者がSolomonで、その題名が彼の名前のスペルを逆順にした‘Nomolos’

であることは、なんとなくマルローの技法が‘オルラムサトルティ’と名づけられたのに関係しているのかなど考えると、カードマジックの歴史を研究することの楽しさを感じてしまいます。

オルラムサトルティ

= エドワード・マルロー、雑誌“ニュートップス”、1965年11月号 =

マルローがオルラムサトルティを発表したときの解説を読むと、‘エイトカードブレインウェーブ’での使われ方と、かなり違いがありますので、マルローの説明の概略を記しておきます。

方 法

マルローは3枚のAの中に1枚のA以外のカードが混ざっているものを、いかにも4枚のAとして見せるという例で、技法解説をしています。

裏向きでトップからAC、X、AS、AHとします。4枚をディーリングポジションに持ち、トップカードを押し出して右手に取り、両手を返して黒と赤のAを見せます。両手をもとの向きに戻して、右手は持っているA、左手はトップカードを押し出して置きます。重ねて置くのではなく、離して置きます。

続けて上の1枚を右手に取り、両手を返して黒と赤のAを見せ、両手をもとの向きに戻して、2枚を先の2枚の左に置きます。4枚が一行になるように並べます。

備 考

上記のように4枚で行うと、色違いのカードを4枚のうちの1枚しか隠すことができません。ニック・トロストが雑誌“ニュートップス”1970年8月号に‘オッドバックカード’を発表したとき、奇数枚でカウントすることによって、偶数枚目にあるカードをすべて隠せることを世に知らしめたことは、この技法をパワーアップした点で、この技法がマルローによって発案され、トロストによって完成されたと私は記録に残すべきだと考えて、ここに説明したのです。

オタックサトルティ

= 加藤英夫、JCS教科書・高校コース、2004年 =

オルラムサトルティをカードの表面で行おうとすると、左手はつねに同じカードを見せなければなりません。その点オタックサトルティでは、右手がボトムからカードを抜いていくことによって、左手のボトムカードが変わっていくように見えます。その代わりに、見せるカードと見せないカードを交互にセットした状態では行えません。見せないカードはトップに置いておきます。

* 方 法 *

裏向きに持った7枚のうち、トップ3枚の表面が赤いカード、ボトム4枚の表面が黒いカードであ

るとします。持ち方はオルラムサトルティと同じです。

オルラムサトルティと同じように右手をポケットの右サイドにかけますが、オルラムサトルティではトップカードを取るのに対して、このカウントではボトムカードを取ります。右手がボトムカードを引きながら、両手を返して、左右のカードの表面を観客に見せます。そして両手を戻し、左右のカードをいっしょに落としますが、右手のカードを下にして落とします。もちろん、左手はトップカードを落とします。

以上を繰り返し、最後の1枚を見せて落とします。全部黒いカードであるように見せられました。

* 備 考 *

このカウントを使うトリックでは、絵札とかAとか印象の強いカードを使うのは好ましくありません。5～9の数のカードを使うことによって、同じカードが2度見せられるのが目立ちません。

JCSの教科書では、オタックカウントとして解説いたしましたが、オルラムサトルティとの関連性を保つため、オタックサトルティと改名いたしました。ちなみに'オタック'とは、私の名前、'Kato'を逆さ読みしたものです。'Nomolos'と'Orlam'との歴史をつなげたかったのです。

これでおわりです

= 加藤英夫、2012年4月21日 =

オルラムサトルティは、7枚のカード使用の場合、そのうちの3枚のカードの面を隠すものですが、この技法は、8枚のカードを使用する場合、7枚もしくは8枚のカードの面を隠すものです。作品解説の中で、その技法、フロント&バックサトルティを解説いたします。

* 準 備 *

8枚のブランクカードを使います。それぞれに「こ」「れ」「で」「お」「わ」「り」「で」「す」と、油性インクで書きます。

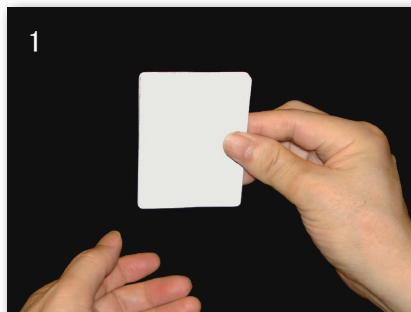
4枚のカードを書いた面を上に向けて、その上に書いた面を下に向けた4枚を重ねます。文字の順番は、以下の方法の通りにやった結果、「これでおしまいです」と並ぶような順番とします。

* 方 法 *

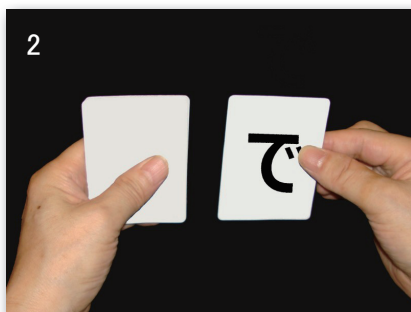
8枚を左手にディーリングポジションよりやや上にずらした位置に持ちます。カードの上の面が観客に見えるように、左手を観客の方に傾けて持ちます。観客の視線の高さがカードと同じぐらいなら、45度ぐらい傾ければ十分です。以下の図は、すべてマジシャン側から見たものです。

8枚のカードをテーブルに並べます」と言います。

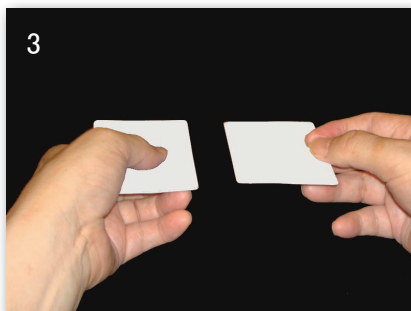
右手でパケットの右サイドをつかみ、右手を上げてパケットを垂直にして、パケットの下面を観客に向けます。そのとき、右中指を上げて右サイドに当てておきます。図1。



左手でパケットの下半分をつかみ、いまもつとも観客の方に向いている1枚を、右手で引いて取り、図2の状態とめて、両方のカードの面を印象づけます。



両手を同時に下げて、カードの反対面を見せますが、左手はそのままとの位置に下げ、右手は中指で勢いよくカードを押して回転させ、結果的に両手とカードが図3の状態になるようにします。



右手はちょうどパドルムーブのように、そのカードの両面を見せたかのような動作をしながら、同じ面を見せることとなります。右手の動作を左手の動作と同調させることによって、本当にカードを返している感じがよく出せます。左右のカードをテーブルに落としますが、左右のカードが並ぶように落とします。

以上の動作をあと2回繰り返します。左右のカードを落とすときは、まえに落とした2枚よりも左隣りに落とすようにします。3組目を落としたときには、6枚のカードが横一列に並ぶこととなります。したがって、最初の2枚は正面より少し右に落とすようにします。

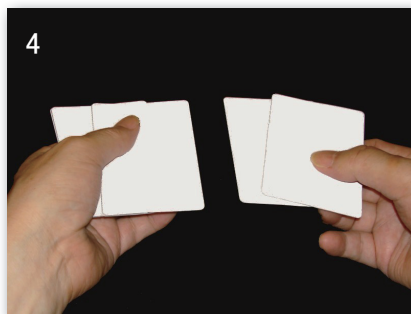
2枚のカードが左手に残っています。また右手を2枚にかけて、両手を上げてカードを立て、観客側の1枚を右手に取り、2枚を左右に分けます。そのときあなたの目は右手のカードに向けます。左手のカードは字が書かれた面が観客の方を向いていますから、それに気づいて左手のカードの方に視線を向け、「あれっ」という顔つきをします。そして、右手のカードを字が書かれていない面を上にして列のいちばん右に置きます。

左手のカードを右手に移し、そのカードでテーブル上のカードに対して魔法をかけます。そしてそのカードを字の書かれた面を上にして、列のいちばん右端に置きます。続けて、右から2枚目から左端のカードまで、つぎつぎの表向きに戻していき、「これでおわりです」の文字を現します。「ということで、私のマジックはこれで終わりです」と言って一例します。

*** 備 考 ***

フロント&バックサトルティを先に理解していただくために、あえて実際の演技で行うことを割愛して、方法を解説いたしました。実際は、冒頭部分はつぎのようにやります。

8枚を取り出して、「ここに何枚かのカードがありますが」と言いながら、上の2枚を広げて右手に持ち、左手は3枚目を押し出して、図4のような形で見せ、「何も印刷されていません」とセリフを続けます。



右手のカードを戻してそろえ、はっきりと8枚を横向きにひっくり返して、図4と同じように広げて見せ、「裏側も印刷されていません」と言います。「全部お見せしておきましょう」と言いながら、カードをそろえます。

8枚をビドルポジションに持ち、観客の方に45度ぐらい傾けます。そして3枚目まで左手に取り、4枚目でハンススイッチを行います。そして5枚目として取ったカードの下にブレイクを作り、6枚目を取るときにブレイク上の1枚をスチールバックして、7枚、8枚と取ります。声を出して数えながらやります。

このあと、方法説明の通りに続けます。もちろんカードのセットについては、以上の操作の結果として、「これでおわりです」と並ぶように準備します。このような複雑な操作のあとにきちんと並ぶようにするには、最初にAから8までのカードをセットして操作を行い、最後にそれらがどの位置にくるかを見て決定すればよいのです。

もちろん、メッセージは8文字なら何でもかまいません。「誕生日おめでとう」でもよいですし、「THE END!」というような使い方もあります。

なお、ブランクカードに文字を書いたカードを使う場合は、フロント&バックサトルティの最後において、左手を文字の書いてある面に深くかけて、文字が見えないようにして行い、いかにもすべてのカードが両面ブランクであるように見せることも、使い道があると思います。この作品でそのやり方をしてもかまいません。

???
?
? **それでいいのかな？** ?
? 第 4 回 間違いを間違って直した例 ?
? ?? ?

‘ダレイディライト’のやり方の真相は？

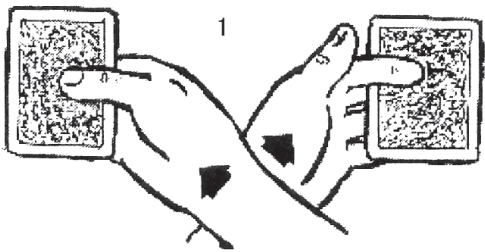
ピーター・ダフイは“Card Conspiracy”(2003年)の中で、‘ホテルダレイ’というホテルミステリーのバージョンを解説していて、その中で使われている‘ダレイディライト’という技法を、作品よりまえに解説しています。その部分を翻訳いたします。

‘ダレイズディライト’(ブルース・エリオット命名)は、カードマジックの中でもっとも見事で巧妙性のある技法のひとつです。それはヤコブ・ダレイ博士によって考案され、“Phoenix” 第 220 号(1951年 1 月)で発表されました。

同号での解説文と図解は不明瞭で、両手の交差のやり方が理解しにくいものでした。のちにエリオットが‘100 New Tricks’(1956年)に同トリックを再録したとき、図解は 3 つに増やされましたが、図解と解説文が適合するものではなく、結果として間違ったやり方が解説されてしまいました。

その間違いはエリオットによるものか、イラストレーターによるものかわかりませんが、ダレイ自身もその説明どおりにやったらうまくいかないことを気づかなかったのでしょう。その図解の間違いのせいか、ダレイズディライトはマジシャンたちに真価を評価されることなく、埋もれた結果となりました。

2 枚の裏向きのカードがテーブルに左右に置かれています。左のカードを左手の親指と人さし指ではさんで取り上げ、右のカードを右のカードを人さし指と中指ではさんで取り上げます。図 1。



両手を近づけ、両手の動きの中で 2 枚をすり替えます。それはつぎのようにやります。右手のカードを下にして 2 枚を上下に位置させ、上のカードを親指と右人さし指はさみ、下のカードを左人さし指と中指ではさみ、図 2、

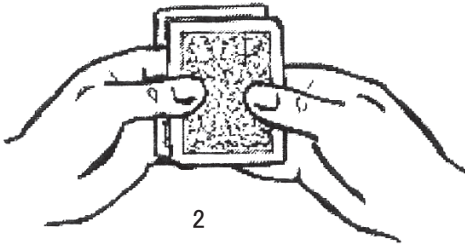
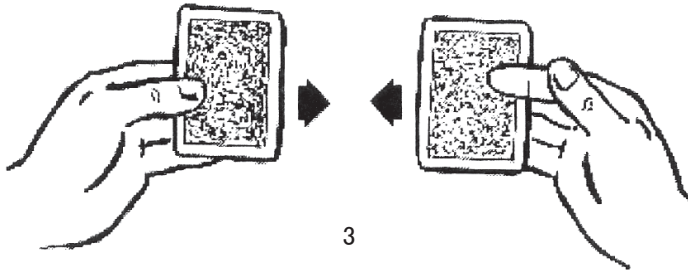


図 2 の位置で両手の動きを止めることなく、右手は左へ、左手は右へ運び続けます。図 3。そしてそれぞれのカードをテーブルに置きます。



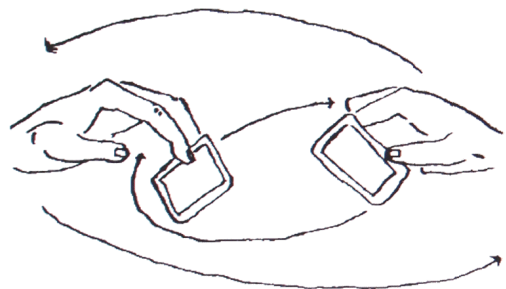
ダフィは以上のように独自の図を用意して解説していますが、念のためエリオットの解説を読むことにいたしました。そうするとどうでしょう。たしかにエリオット解説の図解は奇々怪々なもので、とてもその通りにはできないのですが、図を無視して文章だけを読むと、私にはエリオットが説明しようとしていることがよく理解できたのです。しかもです。エリオットが説明しているやりの方が、私には優れていると思われました。エリオットの解説を翻訳いたします。ただし下にある図は無視して読んでください。文章を読むとき、けして図を見てはなりません。

いまテーブル上に、右に表向きの赤いカードがあり、左に表向きの黒いカードがあるとします。右手で右の赤いカードを親指と人さし指でつかんで取り上げます。左手で左の黒いカードを同じように取り上げますが、人さし指と中指ではさんで取り上げます。このときどちらの手も手の平が上を向け、甲をテーブルに触れています。その体勢で 2 枚のカードを示します。

ここで両手を手前に返して、裏面が観客の方を向くようにします。そして両手を近づけて右手のカードが手前になるように運び、2 枚がほとんど重なったとき、2 枚をすり替えます。すなわち、右手は左手のカードの右サイドを人さし指と中指ではさみ、左手は右の手のカードの左サイドをはさみ、そこで手を止めることなく、右手を左へ運び続け、左手を右へ運び続けます。右手が左手の上を通ることになります。そしてそれぞれが持っているカードを裏向きにテーブルに置きます。

エリオットの文章は以上ですが、私はこの文章を読んでまったくよく理解できました。しかしながら添えられていた図を見ながら理解しようすると、かえって理解できなかったのだと思います。いずれにしても、エリオットは表向きのカードを取り上げて、裏向きにしながら入れ替えたように見せていますが、ダフィは裏向きのまま入れ替えるものとして解説しています。いくら何でもそれは曲解というものです。

ダフィが見て混乱した図はこれです。これを見ながら文章を読んだら、本当にわけがわからなくなってしまうでしょう。



さて、エリオットが不適切な図を使ったことや、ダフィが勝手な解釈をしたことについても、「それでいいのかな？」という気持ちになることはありますが、それは私が言いたいことの主旨ではありません。2人のやり方がはたして「それでいいのかな？」と強く思うのです。

どちらのやり方をやったとしても、カードが重なったときに左右のカードを持ち替えて、手を運ぼうとすると、どうしても両手がぶつかり、もたつきが発生します。面白いことに、ダフィのやり方を練習するうちに、面白いことに気づきました。もたつきが発生するのは、両手が近づくときにすり替えをやろうとするからです。両手が離れるときにすり替えをやると、もたつきがほとんど発生しないのです。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 6 号

発 行 2012 年 10 月 7 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

